

まとめと今後の展望

令和3年度の「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究（1）学生版KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）の開発」をすすめ、下記の二点の成果が得られた。

一点として、千代田区における過去の自然災害の歴史記録の集積と、帰宅困難者施設における防災に必要な情報・用品等のデータが収集された。1）千代田区における過去の自然災害について、①安政大地震（1855年）②関東大震災（1923年）の2つを中心に、関連する歴史資料の情報を収集し、データベース化を行った。資料としては、①は瓦版、鯨絵、古絵図、②は古写真、古地図などである。今年度は、主に安政2年（1855）に発生した「①安政大地震」と、大正12年（1923）に発生した「②関東大震災」に関する歴史資料の情報を収集することができた。2）学生が災害時の食事についてどのように考えているかを把握するためにアンケート調査を行い、日頃から適切な備蓄を行い、災害時に作れる料理について実践しておきたいという積極的な意見が出された。災害時にできる簡単クッキングについて調べ、包丁、まな板を使用せず、水の使用も最小限にする、①空中調理、②混ぜるだけクッキング、③保温ジャー利用による調理、④パッククッキング、⑤焼くという方法を考え、13品試作することができた。学生も、日常の食品を調理するだけでこんなにも簡単に美味しい料理を作ることができることに驚き、日常でも備蓄食品を用いて料理することが大切であることを学ぶことができたという声が寄せられた。3）大学がどのような防災情報を学生に提供しているのか、千代田区・文京区の31大学からの情報発信の内容を調査できた。学生にむけた発災後の行動が67.7%と多い一方で、帰宅困難時の対応事項に関する表示率は20%弱、帰宅ルートの作成等の呼びかけは見られなかった。また、大学近隣の地域の方への帰宅困難者の対応についての情報は、法政大学（千代田区）の1校のみであり、同時に、学生ボランティアの活用と重ね合わせて防災情報を発信していく等の大学での防災情報のあり方について課題が明らかになった。

第2点として、一時帰宅困難者受け入れ施設における避難生活が長引いた場合、災害に対する不安や緊張感などが引き金となり、体調を崩す可能性が高まるのはもちろんだが、問題は自身の体調の変化を自覚しづらいことであろう。そのため、避難施設における有効な健康管理マネジメントを開発する必要性は高いと言える。しかしながら、避難施設における避難者の生命や健康の保護に資する健康管理システムは未だ構築途上であり、避難者における身体の恒常性機能の低下を検討した研究はほとんど見られないことから、本研究で継続的に収集する基礎的資料の意義は大きいと思われる。また、先駆的モデル校である法政大学版の帰宅困難者支援施設運営ゲーム（以下、KUG）を基にした全大学による学習体験と、開発プロセスが共有できた。さらに、学生の防災に対する意識調査の結果、防災ボランティアへの意向も高いことが明らかになった。学びたい防災教育の内容を基に、次年度、具体的なプログラムを開発していきたい。軟な発想によって千代田区に貢献できる研究提案をしていきたい。

次年度、令和4年度も千代田区キャンパスコンソの共同提案事業として研究を深めていくことになった。今年度の成果を活かし、3大学では学生を対象にKUGを、法政大学は職員を対象にKUGの開発と実施を試み、防災・減災意識の変化の効果から、KUGの再構築を図る。同時に、災害復興や防災対策に役立てるために、千代田区における過去の災害の記録、また、防災に必要な情報・用具等の動画コンテンツ等を教材として作成していくことを計画している。

千代田区キャンパスコンソの複数の大学で取組むことにより、1つの大学による提案では難しい多角的な視点から調査・研究をすすめ、各大学の学生が連携して取組み、多様なものの見方・考え方を理解し、新しい気づきにより柔軟な発想によって千代田区に貢献できる研究提案をしていきたい。



謝 辞

本研究におきまして、千代田区より助成を頂き、研究活動が出来ましたことに深く感謝いたしております。これを機に、千代田区の帰宅困難者支援の施策に学び、大学の役割を、教職員が学生と共に語り合い、学びあう機会を持つことができました。防災・減災意識を高めることは、学生・教職員のお互いの命を守ることはもとより、家族、地域と共に、過去を生きてきたこと、また、これから生きていくことへの期待と挑戦になっていくことでしょう。同時に、本研究を通して、千代田区キャンパスコンソの活動自体を強化することにもつなげることができました。

本研究を進めるにあたって、千代田地域振興部コミュニティ総務課の皆様には、研究事業の遂行を多面的にご支援いただきました。心より感謝申し上げる次第です。また、私たちの研究活動を支援し続けていただきました関係者の皆様のご理解とご協力に、この場をお借りして深甚の謝意を表したいと存じます。



【付録】活動紹介動画（ちよだコミュニティラボライブ 2022 参加）

「ちよだコミュニティラボ 2022」<https://chivolab.jp/archives/15011> (2022.3.12) ウェブサイトより

ちよだコミュニティラボ

自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究～学生版KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）の開発

東京家政学院大学人間栄養学部人間栄養学科（教授）酒井治子 さん／大妻女子大学短期大学部家政科（教授）下坂智恵 さん／共立女子大学文芸学部文芸学科（准教授）近藤壮さん／法政大学法学部法律学科（教授）伊藤マモル さん



テーマ

自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究（1）学生版KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）の開発

活動内容

近年、首都圏においても直下型地震やゲリラ豪雨などの予測困難な大規模自然災害が発生し、対策も行われてきている。千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアムの5大学・2短期大学を含む大学では、千代田区と『大規模災害時における協力体制に関する基本協定』を締結し、大学が対応可能な範囲で「区民や一般の帰宅困難者の受け入れ」、及び「情報・食糧・飲料水などの提供」などの使命を担うことになっている。

そこで、今年度の目的は、各大学の施設運営に関する計画や災害対応体制の再構築に関する課題を明確化し、災害復興や防災対策に役立てるために、千代田区における過去の災害の記録や記憶、また、防災に必要な情報・用品等をアーカイブ化することである。さらに、千代田区における災害対策・危機管理政策経営に資する大学版の帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発のための基礎資料を得ることをめざしている。そのために、①千代田区における過去の自然災害の歴史記録の集積（写真A）と、防災に必要な情報・用品等のデータ収集、②帰宅困難者支援施設の健康管理、③帰宅困難者支援施設運営ゲームの体験会&学生ファシリテーター養成会等（写真B）の活動を進めている。

活動紹介動画



執筆者

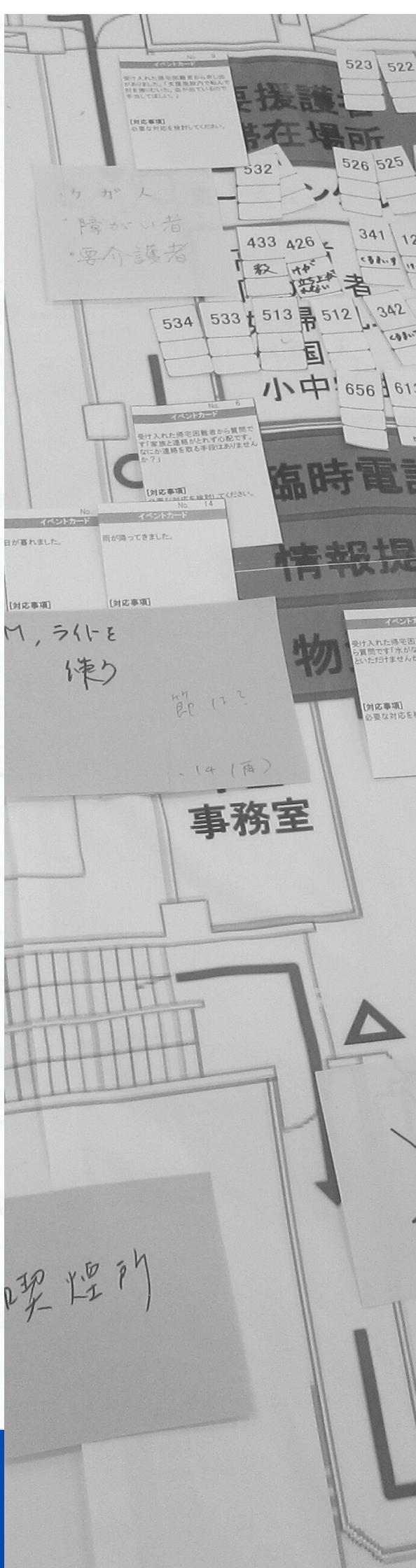
- 酒井 治子 東京家政学院大学 人間栄養学部 教授
(はじめに、第1章、第2章 第3節、第3章 第3節、まとめと今後の展望)
- 下坂 智恵 大妻女子大学短期大学部 家政科 教授
(第2章 第2節)
- 近藤 壮 共立女子大学 文芸学部 准教授
(第2章 第1節〈1〉)
- 伊藤 マモル 法政大学 法学部 教授
(第3章 第1節、第3章 第2節)
- 森谷 ひとみ 共立女子大学大学院 文芸学研究科 (修士課程1年)
(第2章 第1節〈2〉)

(所属は令和4年3月現在)

令和3年度 「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度 共同事業
「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」
(1) 学生版 KUG (帰宅困難者支援施設運営ゲーム) の開発
報告書

令和4年(2022)3月

「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム(千代田区キャンパスコンソ)」
幹事校 東京家政学院大学 人間栄養学部 酒井治子
〒102-8341 東京都千代田区三番町22番地
Tel:03-3262-2251



千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム

東京家政学院大学／大妻女子大学短期大学部／共立女子大学／法政大学